

## 1) ムラサキ=紫草

ムラサキはムラサキ科の多年草である。日本各地の草原や山地に生え、染料をとるために栽培されることも多い。高さは 30~60cm で茎は直立し、紫色の太い根がまっすぐに地中深く伸びる。葉は互生し長さ 3~7cm で、6~7 月ごろ葉腋に白い小花を多数つけ、秋には堅い果実を結ぶ。和名の由来は「群れ咲く」が転じたものとも、紫色を示す古い朝鮮語である [pora saki] に由来するとも言われている。別称としてはミナシグサとかアイヌではペウレ(赤いという意味)などとも呼んでいる。学名は『*Lithospermum erythrorhizon*』で、属名は「石のように堅い種子」ができることに由来し、種小辞は「赤い根の」と言う意味である。また英国では『hand mass』、中国では『紫草』と呼ばれている。

紫の根からとる染料は古来より重要な物であった。しかし日光にあたると褪せやすかったために、今日ではあまり使われなくなってしまった。中国では薬草として古くから利用されており、500 年頃の『神農本草経』(シンノウホンゾウキョウ)にその名が見える。漢方では根を干したものを『紫根』(02-03-20 サワフタギの項参照)といい、解熱や皮膚病の治療などに用いた。中でも『紫根』とセリ科の『当帰』(トウキ)を主成分にした軟膏『紫雲膏』は、火傷、凍傷、ヒビ、アカギレなどによく効き、婦人病に良いとされた『当帰芍薬散』とともに、江戸時代のいわばヒット商品だった。江戸時代の医師、華岡青洲もこの薬をよく用いていたという。

さて飛鳥時代の 603 年、推古天皇の時代になると、主に百済の冠位制を手本にして、冠位十二階の制が施行された。これは徳、仁、礼、信、義、智をそれぞれ大小に分けて 12 階とし、冠の色を紫、青、赤、黄、白、黒の 6 色として、大小は色の濃淡で表すものであった。紫色は最高の位階を表わす色で、『日本書紀』の「皇極紀」(641~645 年)には、

蘇我大臣蝦夷(エミシ)、病によりて朝(ツカマ)らず。私に紫冠(ムラサキカブリ)を子入鹿(イカ)に授けて、大臣のくらいに擬(ゲラ)ふ。

と記されている。その後 645 年には蘇我氏は滅び、『大化の改新』となったのである。

『万葉集』には紫を詠んだ歌が 17 首見え、「紫」のほか「牟良佐伎」「无良佐伎」などの文字を当てている。しかし花を詠んだものはなく、すべて紫の色と染料に関して詠んだものである。中でも特に有名なものは、額田王(ヌカダノオオキミ)と大海人皇子(オオアマノオウジ)とのやりとりである。

あかねさす紫野(ムラサキ)行き標野(シラ)行き 野守(ノリ)は見ずや君が袖振る  
この歌は天智天皇即位の七年五月五日に、大海人皇子(オオアマノオウジ)以下皇族方が、群臣を率いて薬獵(クスリガリ)に行かれたときのものである。このとき丘の上から天智天皇とともに、一行の様子を見ていた額田王に向かって、大海人皇子はしきりに手を振っていた。彼女はもとはといえば大海人皇子の妃として、十市(トカチ)皇女を生んだ関係であったが、今では天智天皇に仕える身となっていたのである。この歌

に対して大海人皇子、つまり後の天武天皇は次のように返す。

紫のほへる妹(妹)を憎くあらば 人妻故(妻)にあれ恋ひめやも  
歌の意味するところは、「紫の匂うように美しいあなたが憎いと思うなら、どうして人妻と知りながら、あなたに恋したりいたしましょうか。」というもので、大海人皇子の心の奥を表現したものである。この額田王をめぐる三角関係は、日本古代史上最大の内乱となった 672 年の『壬申の乱』の契機の一つになったとも言われている。また「紫野」は現在、京都市北の地名ともなっており、当時は平安京七野の一つで、朝廷の狩猟地となっていた。「標野」とは朝廷の御料地のことで、「薬獵」は薬草をとったりして、山野で過ごす宮中の行事であった。

『万葉集』の中には、麻田連陽春(アサダノムラジヤス)の歌として

韓人(カレト)の衣染むといふ紫の 情(ココロ)に染(シ)みて思ほゆるかも  
という一句がおさめられている。作者は百濟系の二世にあたり、紫の染色法が朝鮮から伝えられたことを物語っている。当時の染色法はいわゆる灰汁媒染によるもので、この染色法は椿(01-07-01-1 参照)やサワフタギ(02-03-20 参照)のところでも見てきたとおりである。『万葉集』には

紫は灰さすものぞ海石榴市(ツバ イ)の 八十(ヤチ)の衢(チマ)に逢へる児や誰  
という歌も残されている。また清少納言は、「めでたきもの」の中で「花も糸も紙もすべて何も紫なるものはめでたくこそあれ」と記している。しかしこの染色は前述の通り褪色しやすいという欠点もあった。『枕草子』では紫色が褪色することを「灰かへる」と表現しており、「灰さすもの」と対になっていたのだろう。

また『源氏物語』では「紫の上」は光源氏の理想とした妻の名前であった。藤壺に似た面影の少女として、光源氏が引き取って理想的な妻とすべく養育し、葵の上の没後に結婚して正式に妻としたが、その後心労が重なって病気がちとなり、源氏に先だって「御法(ミリ)の巻」で没する、悲しい運命の女性であった。紫式部が見た紫はそんな哀しい色だったのかもしれない。『源氏物語』の「若紫」の巻では、「むさしのといへば かこたれぬとむらさきのかみにかい給へる」と記されている。当時は武蔵野には紫草が茂っていたと思われていたようで、『古今集』には

紫の一本(ヒトト)ゆゑに武蔵野の 草はみながらあはれとぞ見る  
という歌が残されている。紫は「紫のゆかり」といって「愛しい人」「たいせつな人」「縁故(ヱグ)」のある物や人をいう言葉でもあった。『源氏物語』の「末摘花」には、

かのむらさきのゆかりたづねとり給ひて、そのうつくしみに心いり給ひて  
と記されているのである。

紫はまた宮中の庭園のことをも意味しており、『紫微宮』(シビキュウ)のことを、「紫の庭」と呼んでいた。紫微宮とは「紫の星」といわれていた『紫微星』から生まれた言葉で、この星は「天帝」に例えられていた。そして「紫の雲の原」は皇居のことをいい、

瑞雲のたなびく場所と考えられていた。というのも「紫の雲」というのは、めでたいしるしとして、たなびく雲とされ、天人が乗ったり、仏が乗って来迎するという雲のことであった。『枕草子』の冒頭は以下のように始まる。

春は曙、やうやう白くなり行く山際少しあかりて紫だちたる雲の細くたなびきたる…

この紫だちたる雲が瑞雲というわけである。しかし和歌の世界ではこの言葉は、藤の花が咲く様を語ることが多い。『拾遺集』には藤原公任(フジワラノキントウ)の歌として

紫の雲とぞ見ゆる藤の花 いかなるやどのしるしなるらむ

とある。『源氏物語』の「宿木」には

君がため折れるかざしはむらさきの くもに劣らぬ花のけしきか

と描写されており、後には「瑞雲」は皇后を表わす言葉となった。『後拾遺集』には

紫の雲のよそなる身なれども たつときくこそ嬉しかりけれ

という江侍従の歌があげられている。

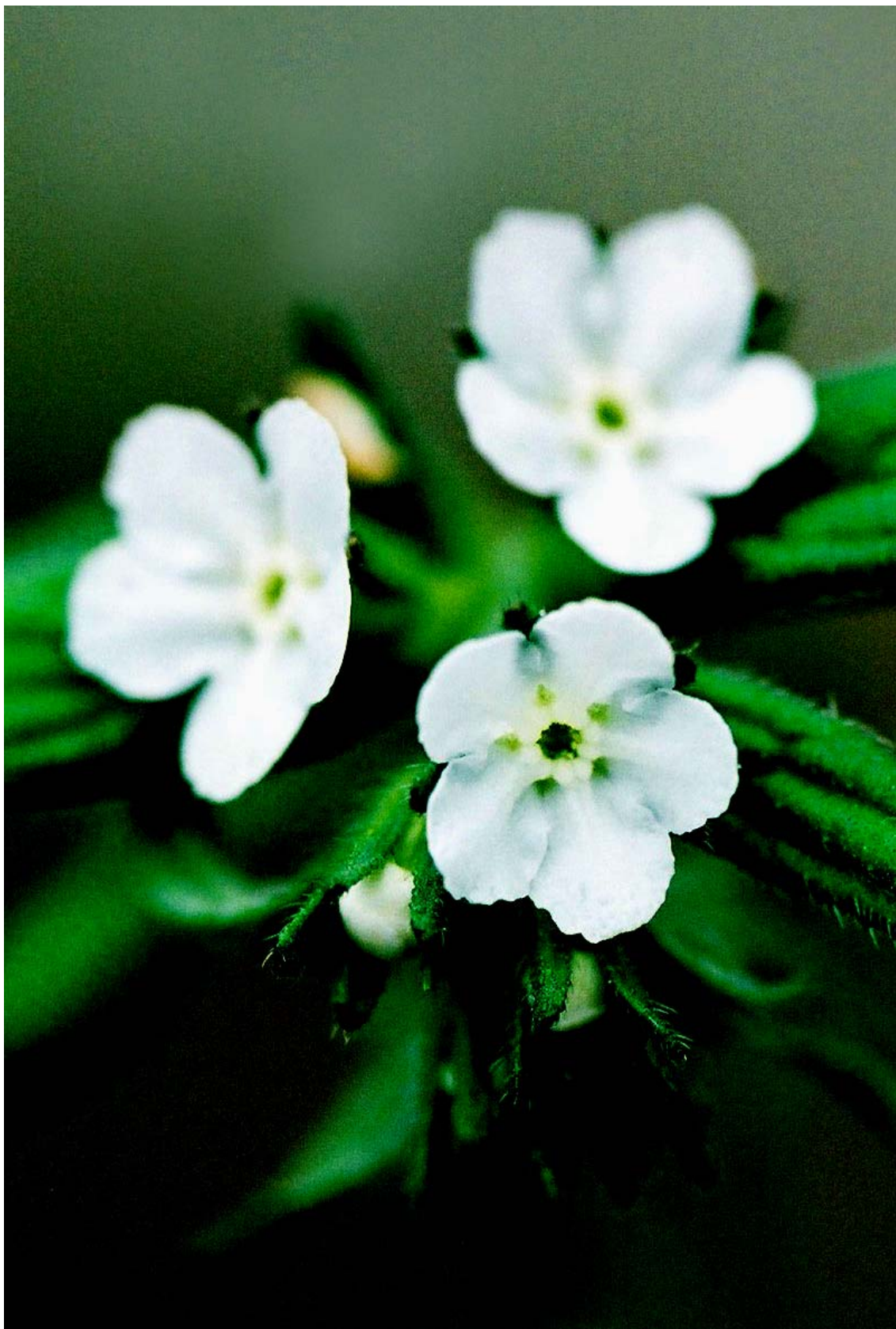
紫はほかにもいろいろな意味の言葉として用いられた。「紫の朱(アケ)を奪う」は、もともとは孔子の言葉だが、『徒然草』の中にも記述され、「偽物が本物を乱す」という意味で用いられており、「悪貨が良貨を駆逐する」というのと同じ意味である。

また紫は「鯛」のことを言ったという。紫式部が鯛を食べたことを夫に言うと笑われたので、次のような歌を詠んで夫に一矢を報いたという故事に由来するものである。

日の本にはやらせたまふ岩清水、まゐらぬ人はあらしとぞ思ふ

誰でも流行っているものは味わってみたいと思うもので、それは岩清水であろうと鯛であろうと同じこと、と言ったのである。鯛と岩清水をかけたところが面白い。

江戸時代になると紫はさらにいろいろなものへと広がりを見せる。江戸紫という色は、江戸人情や意気込みを象徴する色ともなり、江戸紫といえば江戸そのもののことでもあった。また祭り好きの江戸っ子が担ぐ、神輿のあたりには紫色の幕が張られた。もっと身近かな物としては、色が紫であるところから「醤油」を紫と呼んでいた。これは現在でも寿司屋などでは、日常的に使われているからご存じだろう。「紫海苔」は『新撰字鏡』にも「牟良佐伎乃利」として現れる由緒あるものだったが、江戸では浅草海苔のことを「紫海苔」と言った。「紫鯉」は、江戸川関口付近で取れた美味しい鯉のことで、庶民は口にすることができなかった。また当時は女性のことを「紫」とも言っていたらしい。日葡辞書によれば『Murasaki(ムラサキ)。すなわちオナゴ』と記されている。「紫帽子」は歌舞伎の女形役者が、前髪の部分につける紫縮緬(ムラサキチリメン)の布のことであり、「紫頭巾」は女性がかぶる紫色の頭巾のことだったから、このあたりに紫がオナゴのことを言うようになった背景を見ることもできよう。「紫衛門」は明治、大正の頃女学生の袴が多くの場合紫色だったので、平安時代の女流歌人赤染衛門(アカゾメエモン)の名前をもじったものであった。



花径 1cmに満たないムラサキの花は紫色ではなく純白である(小平市薬用植物園)。



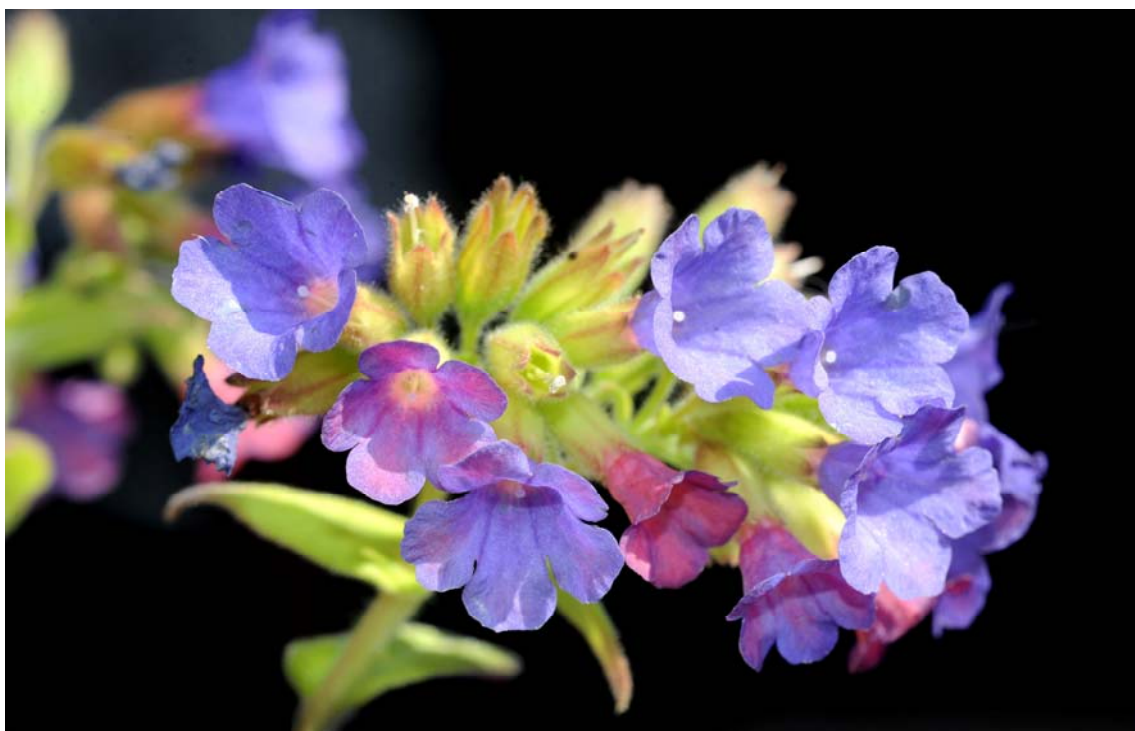
名前に比して、地味な白い花ではあるが、どこか愛おしい花でもある。そう思えてくるのは 1,000 年以上に及ぶその歴史と、日本の伝統文化のためかもしれない(さいたま市緑区)。



筆者はこの花を見るまで、ムラサキには紫の花が咲くものと思っていた。



その紫の仲間では代表的なのがこのヤマドリ草で、福島以西の山間地の半日陰に自生する。



しかし北海道にはエゾルリソウが自生し、各地に亜種が多い。学名は『*Omphalodes japonica*』。  
写真は越後ルリ草で、ワスレナグサ(01-02-12)もこの近縁種になる。

[目次に戻る](#)